



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1994 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町1 2-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 生命への権利

### アンジェルス黙想：1

● 本日は再び回章「真理の輝き」に目を向け、道徳生活の基本原則のいくつかを提示してみたいと思います。回章の出発点はキリストと若者との会話(マテオ19・16参照)です。「師よ、永遠の命を受けるために私はどんなよいことをすればよいのでしょうか。」イエズスの答えは「命を受けたいのなら掟を守れ。」(マテオ19・17) 若者が「どの掟を」と尋ねると、イエズスは十戒を引用してお答えになります。この会話は人間の心に永遠の命への望みが根をおろしていることを示しています。望みがかなうかどうかは、十戒を守るか否か、言い換えば神が授け、聖書に啓示された行動の規範である道徳の掟を実行するか否かにかかっています。掟を守れと仰せになったイエズスは、至高の立法者で

ある神がシナイ山でモーセを通じてイスラエルの民に下したのと同じ命令を繰り返したにとどまりません。十戒によって神はイスラエルと契約を結ばれたのです。モーセと民は十戒を守ることを義務づけられ、神はイスラエル人が約束の地に入ることを保証されました。十戒の遵守は、約束の地に象徴される永遠の生命を得るための条件です。

● 神がモーセに示し、キリストが福音の中で確認した(マテオ5・17、19参照)同じ法が、創造主によって人間の本性に刻まれています。使徒パウロの手紙にある通りです。「律法のない異邦人が自然に律法のおきてを実行するならば、律法がなくても自身は律法である。」(ローマ2・14) すなわち神がモーセを通じて選ばれた民に示した道徳の掟は、人間の本性に刻まれたものと同一です。従って、初めからある掟に従うことは人間の本性の一部をなしており、どんな人でも父母を重んじ、生命を尊ぶべきことを知っています。姦淫するな、盗むな、偽証してはならない、それらも承知です。言うならば、自分がしてほしくないことを他人にもしてはならないと心得ているのです。

● ローマ人への手紙の中でパウロはさらに言います。「彼らは自分の心に刻まれているこの法の存在を示している。」(2・15) 良心は証人の姿で示され、人が心に刻まれた法を破れば糾弾し、守れば良しとします。すなわち、使徒の言葉に従えば、知性と自由を持つ存在である人間の本性と密接に結び付いた法があり、その法が良心の中でごだますというわけです。良心の平和を保つとは、本性に刻まれた法との平和を保つことであり、この法に一致して生きれば、すなわち良心に従って生きることになるのです。もちろん、真実で正しい良心、つまり創造主が人間本性に刻

んだ法の内容を誤りなく解釈する良心の場合ですが。聖書、特にローマ人への手紙に見えるこの教えを黙想することは、教会と人類の歴史において常に大切なことです。近年は特に緊急必要事となつていまして。とりわけ、深い関係のある家族と生命に対する基本的義務という面では。国際家族年には、何よりもまず人権の基本とも言える生命の権利を強調しなければなりません。この権利は、たとえば生命(特に胎児)への抑圧を合法化することなどによって否定されては

なりません。アンジェルスを祈りを唱え肉となった(ヨハネ1・14参照)みことばの母マリアへと向かいます。世に来るにあたり、神の独り子は私たちに命を、豊かな命を与える(ヨハネ10・10参照)ことを望まれました。命の御母の取りなしを通して主に祈りましょう。各人の心に刻まれた神の法が尊ばれますように。全ての人の生きる権利が尊重されますように。神の法を守らぬかぎり、永遠の命を得ることはできません。(六・十二)

## 自然法の大切さ

### アンジェルス黙想：2

▼ 先週のアンジェルス祈りの時に、神が人の心に刻まれた自然法について考えました。が、本日はそれに続いて家庭について話したいと思えます。今年には教会も社会も特別な注意を家庭に向けています。家庭は社会の基本となる細胞であり、すべての民族と文化を結び付ける自然法に確固として基づいています。今、家庭のこうした面に気づく必要があります。教会が結婚や家庭の倫理について主張すると、信者にしか通用しない信心があった見方を社会全体に押しつけようとしているかの如く思われることがしばしばです。例をあげれば、ヨーロッパ議会が出した同性愛者どうしの新しい家庭を法で認める提議を、私が容認できないと表明したとき巻き起こった反応を見るとよくわかります。実際、男と女が互いに自己を捧げ合う、生命に向かって開かれた永続的な結びつきとしての結婚は、単なるキリスト教的価値にとどまらず、創造の原初の価値なのです。この真理を見失うことは、信者のみの問題ではなく、全人類にとっての危険でもあります。残念なこと今日では、相対主義が忍び寄って客観的

# 家庭は真理の上に

## きずかれる

な真理の存在そのものすら人々は疑うようになりました。ピラトがイエズスに尋ねたあの有名な問いかけ「真理とは何か」(ヨハネ18・38)が聞こえてくるようです。こうした懐疑主義は、いかなる倫理的制約も認めず、どんなに明白な自然の事実をも意のままに改変しようとする試み、誤った自由の観念へと通じます。

もちろん、人間は限られたやり方でしか真理を見つけないことはできず、真理を求める巡礼者にすぎません。しかしそれは、相対主義や懐疑主義とは全く別物です。実際、私たちの知性はいろいろなことに影響されて暗み、弱められませんが、こと個人や社会の成り立ちに関わる基本的な価値が問題となると、物事の真実を判断することができないのです。それは各人の良心に刻まれた、人類共通の遺産でもあるからです。人間性に反するような罪があった場合、法では許されても良心は黙っていないことから見てわかるでしょう。事実、神が心に刻み込まれたがゆえに、自然法は人が作ったどんな法にも勝り、それらの法の有効性を測る物差しとなるのです。

どうか幸いな処女が世界中の家庭に神の計画を深く悟らせてくださいますように。家族が考察と刷新の機会となりますように。特に、家庭の暖かさに包まれる権利を持ち、それを何よりも必要とする子供たちのために役立ちますように。(六・十九)

本日の典礼は神殿のたとえを用いています。石でできた神殿のみならず、人間でできた神殿。ここで私たちの思いは家庭に向かいます。教父たちによる昔の教会の伝統は、家庭を「家庭教会」と呼んでいるからです。それは両親と子供たちから成り、神がその内に住んでおられます。神はこのお住まいを生きさせた神殿にしたいとお望みです。ですから家庭は「家庭の教会」なのですが、そうなるためには回章「真理の輝き」でも述べたように、真理という確かな基礎に基づいて必要があります。

真理の力は私たちの中に、私たちの間に、家庭に、社会に、人類の内に、神殿を打ち建ててくれます。ある人々は真理なしで、真理に反対して神殿を建てようとし、攻撃目標となるのは家庭教会としての神殿です。真理の基礎を掘り崩し、人間の弱みにつけこみ、離婚や別居、老人と胎児の生きる権利に反するあらゆることを法のもとに保障させようとする動きがあります。それは生命を擁護する基礎や教えと相反する主張です。生命は神聖なものなのです。二人の男性、あるいは二人の女性から成る家庭を合法化しようと

する試みにも、同じことが言えます。私たちは男性であれ女性であれ全ての人が敬意を払いますが、このような家族構成は誤りであり、危険です。家族年あたり、真の家庭を守るために、教会は非常な慎重さと勇気を要します。人間のあらゆる弱点をキリストの如くよく理解しながらも、恐れることなく妥協もせず、社会を築く原理となるべき家庭を尊重しなければなりません。私もそのように努めています。教皇自身は厳しくも厳格でもなく、温和な人物ではありませんが、原理原則には忠実でなければなりません。建物は真理と真理の教えに基づくのです。今日、教会は神の掟・十戒を提示します。これこそは教会の永遠の礎石です。無視することはできません。どの礎石も堅く守らねばなりません。それが教会の拠り所です。

十戒について語る旧約の記述は福音書に引き継がれます。イエズスはエルサレムの神殿が破壊されるであろうと言われ、紀元七十年の悲劇を予告しました。石造りの神殿は壊されるだろう。私の肉体という神殿を滅ぼすこともできるだろう。だが私は、三日でそれを建て直す。イエズスのこの言葉は

復活の約束です。死んで復活したキリストは、いしずえの石、家庭教会という建物全体の、また人類の角の親石としてとどまっておられます。カトリック教会の使命は人間生活をイエズスという石の上に築くことです。聖パウロは、神の賢明なご計画によって、女性に委ねられた使命は、その人格存在の深奥に根ざしています。男性と同じ尊厳を有しながらも男性とは異なる、女性としての固有の賜を受け、人間であり、一人の女性であるという事実によって、ある特別な価値を示しているのです。

皆さん、教会は女性の皆さんに呼びかけています。生活を福音化してください。生命はどんな時でも愛を込めて受け入れ、守り、注意深く養い育てるべき贈り物なのだ、全ての人に宣言してください。生命は常に、宗教的な感覚と賛嘆の思いで接するべき秘義なのです。

出産という女性の特別な役割は、人間の生命と成長に対する女性特有の感受性の源であると考えられます。それには明確な責任も付随します。優しさのかけらもない緊張に満ちた現代にあって、「女性独特のあの才能、つまり、どんな境遇においても人間に対する感受性を失わないという才能」

# 女性の使命

私たちの知恵・私たちの力だと言いました。逆説ではありませんが、十字架に付けられたこの御方こそ私たちの全ての力の源です。苦しむ人、人生を誤りたくない人、正しい道を歩もうとする人、破壊ではなく建設を目指す人の力なのです。(九四・三・六)

(「女性の尊厳と使命」30番)が何よりも必要とされるのです。生命の福音を告げ知らせてください。現代の社会・経済・政治文化にふさわしい倫理的な側面を与えるために。(「信徒の召命と使命」51番参照)

人間と社会に新たな文化をもたらすことは、決意と勇気をもって立ち向かうべき大きな課題です。現代のイデオロギーでは人間の尊厳と召命を重視した社会を築く上でほとんど役立たないことが明らかになった今、この課題は新たな重要性を帯びています。これこそ、女性の特別な「預言的」役割です。今日、女性には人類と世界のために違う文化を作り上げる使命があるのです。

主の摂理が皆さんに呼びかけるこの一大課題を前にして、マリアは神が望まれた女性らしさのあらゆる美点と女性特有の創造性を具現する、永遠の模範です。皆さんもマリアに習い、マリアに従ってくださいますように。(…)

(九三・十二・十四)

世の光イエズス・キリスト「カトリック教会のカテキズム」要約O&A...:定価二二〇〇円 千三〇〇円  
全世界のカトリック信者のための「カトリック教会のカテキズム」を底本に書き下ろされた、問答形式の要理書。「カトリック教会のカテキズム」のエッセンスを凝縮し、従来の要理書では扱いの少なかった現代的な問題(性倫理など)に明確な指針をくだす、実践的なカテキズムです。

# 説教・講話・書簡等の抄訳

●「教皇様の声」カテケージズ・シリーズ別売のお知らせ  
「声」紙上に掲載中の教皇様による毎週水曜日の聖ペトロ広場でのカテケージズ・シリーズのうち、一昨年度までの分をコピー版で別売しています。「創造」「摂理」、「イエズス・キリスト」、「贖いと罪」「聖霊」など、1〜3集、送料共一〇〇〇円〜二二〇〇円。ご希望の方は精道教育促進協会まで。

## ペトロとその後継者

### 教会シリーズ 21 (後篇)

ローマ教皇は「信仰と道徳に関することのみならず、全世界の教会の規律と統治に関するものがらについて、全教会に対して最高の統治権を有する。」(第一バチカン公会議) 教皇の有するこの権能は、司牧指導者にとって不可欠な「仕えるための権能」であり、教皇のもとに結ばれた司教団全体が有するものでもあり、司教団の一致と全体性の根本です。

ピオ九世が認可したドイツ司教団の宣言(一八七五)によれば、「教皇の任務は神の制定によるものであって、司教職の任務も神の制定によるものである。司教には神自身が定めた権利と義務があり、教皇はこれを変更する権利も義務も持たない。」従って「司教の統治権は教皇の統治権に吸収されている」とか「教皇自身が全ての司教にかわってその地位につく」とか、司教は単に「教皇の道具であり、固有の責任を持たない役人である」(OSST)とかいう解釈は第一バチカン公会議の諸教令を誤解していることになりす。

望んだ。しかしキリストは、この司教職それ自体が唯一で不可分であるようにと、聖ペトロを他の使徒たちの上に立て、そのペトロ自身の内、信仰と交流の一致の永久に見えぬ源泉および基礎を制定した。(教会憲章18番)  
このように公会議は、ローマ司教について「全教会の上に最高、完全な権能を持つ牧者」(同22番)であるとも教えています。この権能は「牧者も信者も含めた全ての人に対する首位権」(同)です。「従って司教は、自分たちに固有の任務が許す限り相互に協力し、また、キリスト教を広めるといふ重大な任務を特別に与えられたペトロの後継者とも協力しなければならぬ。」(同23番)  
同じく第二バチカン公会議によれば、キリストに従う全ての人が、救いの使命と使徒職において共に働かなければならないという意味でも、教会は普遍的な活動は、ローマ司教のペトロ職(ミステリウム・ペトウリウム)を通じて一致することができます。「司教たちはその団体の中で、自分の頭の首位権と卓越を忠実に認めながら、自分の信者の善のため、さらに全教会の善のために、自分に

固有の権能を行使する。。(教会憲章22番) また公会議は、全教会に対する司教の団体的権能は公会議において特に表れると述べており、「会議を召集し、それを司会し、それを確認するのはローマ司教の特権」(同)であると結んでいます。全ては一致と交わり源であるローマ司教、つまり教皇に依存しているのです。  
5 一つ指摘しておきたいことがあります。第一バチカン公会議(一八七〇)で表明されたローマ教皇のペトロ職についての教会の教導職の伝統を第二バチカン公会議が採用しているのは、これによって教会の中の首位権と司教団の相互関係が明らかになるからです。それによって第一バチカン公会議の決定についての誤った解釈はなくなり、ペトロから受け継いだ任務(ペトロ職)の正しい意味が司教の団体的性に関する命令との調和のうちに示され、「全教会の司牧者及び信者と自由に交流する権利を持つこと」、ローマ教皇の権利が確認されました。(Pastorale, ch. II: DS 3060, 3062参照) ペトロの後継者がイエズスの言う地上の「統治者」の権能(マテオ20・25・28参照)と同じ権能を持つと主張しているのではなく、信仰と愛において共同体に仕えることができるように、この種の統治形態と社会を形成された、教会の創始者である主の御旨に忠実であるべきだと教えているのです。キリストの御旨を果すため、ペ

トロの後継者は謙虚な奉仕の精神のうち確かな一致を目的として、受けた権能を引き継ぎ、行使します。この権能を行使する時、一つの群れの中の一人になるよう呼ばれた人々をまとめ、その人々に仕えつつキリストに倣わなければなりません。教皇はキリストと教会のために受け継いだものを個人的な目的の下におくことは決してありません。普遍的司牧の使命  
「あなたたちは命のこぼれを保持し、世のともしびのようには輝く。」(フィリッピ2・16参照)  
(…)「あなたたちも光を輝かせよ。」とは言え、私たち自身が光を発しているのではなく、キリストの光の反映です。キリストは「すべての人を照らすまことの光」(ヨハネ1・9)なのです。大切なのは、イエズスの光もイエズスに従う人々の光も同じ光でなければならず、そのためには回章「真理の輝き」でも述べた通り、教会は使徒たちとその後継者である司教たちの手で現在まで継承されてきた福音の真理に従って歩むべきだ、ということなのです。

イエズスの生涯と言葉から見て取れる教えは、私たちへの最も貴重な遺産です。神と人間と世界の本質が、信頼に足る方法でそこには示されています。この本質それ自体に本来の変らぬ真理が備わっているため、道徳性の源、すなわち善悪の規律のもととなるのです。一個人が、あるグループが、時には大多数の人が正しいと考えても、それだけである行為が正当化されるわけではありませぬ。行為が正しいと言えるのは、救い主が教えてくださった人々、世界、神の真実に応える場合のみです。  
よく考えてみれば、人類の苦しみ的大部分は十戒の掟と福音書の愛の掟に示された真実の善から離れさまよったところから生じているのです。真理の光を守ること、そして最も大切な救いと生命のために働くことこそ、キリスト信者である私たちの責任です。教会の教えに耳を傾け、教えを不変の価値あるものとする理由について考察し、忍耐と内的喜びをもってそれらを実行に移さねばなりません。(…) (九三・十・十七)

## 御国のために生きる力となる

# 不変の教え

## IIの教会の 架け橋！

(教皇様は、テサロニケから訪れた正教会の神学生たちをお迎えになった。)

「あなたたちに恩寵と平和があるように。」(Iテサロニケ1・1)

聖パウロの手紙の言葉をもって、皆さんをお迎えいたします。ローマで、皆さんはキリスト教の遺産を目にしておられます。それは皆さんのものとは確かに異なりませんが、互いに補い合うものなのです。皆さんがじかに触れることによって、兄弟のように神学的、霊的な発展を共にすることができましょう。それが私たち二つの教会の一致を念頭にして教会の生命を富ませ、ひいては諸国民と信仰のヨーロッパを築くために貢献することでしょう。

このように見ると、聖ベネディクトと共にヨーロッパの守護者とあおがれる二人の聖人、聖チリロとメトジオは、私たちの模範です。テサロニケを出発し、ローマにやってきた二人は、それから行く先々の文化を尊重しつつ福音を宣べ伝えながら、ドナウ河流域をまわりました。テサロニケ出身の兄弟聖人の足跡をたどり、皆さん

が私たち二つの教会とその伝統とをつなぐ架け橋となってくださいますように！

私たちは霊的・歴史的な絆で結ばれています。実にパウロはテサロニケでもローマでも福音を語ったのです。テサロニケやローマに宛てた使徒の手紙は今もなお、知性を通して神の秘義の深さを理解し、何も留保せず忠誠を尽くすよう力強く訴えかけます。神学の研究を通じて生きる言葉への理解を深め、世界を救う御方を知りたいと望む現代の人々の前で証人となってください。

お国へ帰られたら、司教の方々、特にテサロニケの府大主教、そして神学部の教授と学生の方々に、私の心からのご挨拶をお伝えください。

最後に皆さんを聖三位一体と神の御母のご保護に委ねます。もう一度使徒パウロの言葉を用いるために耐えず神に感謝し、祈りの中に思いだしている。常にあなたたちの信仰の働きと、愛の労苦と、主イエズス・キリストへの根強い希望を思いだしている。」(Iテサロニケ1・2・3)

(九四・三・五)

● 6・21 エクアドルの司教団を迎えて。「離婚、中絶、親であることの真の責任を顧慮しない産児制限などの悪に脅かされる家族たちに、目を向けることが急務です。」

● 6・22 一般謁見で、女性の尊厳と使命についてのお話。教皇様は男女の完全な平等と互いに補い合う性質について、また女性の尊厳に敬意を払う必要性について力説された。

● 6・25 創立50周年を迎えるイタリア・スポーツセンターのメンバーたちへ、聖ペトロ広場にて。「スポーツがそのプレー、自由、社交性、自然との触れ合いなどの人間的な次元を保つかぎり、人生の表現と呼ぶにふさわしいものだと思います。」

● 6・27 ローマ訪問中のチャド司教団と、召命の促進、経済的自立、イスラム教徒との対話の必要性について話し合い、「平和の文化を育てることが国土再建への道を助ける」と話された。

● 6・28 コンスタンチノーブル総大主教区の代表使節団を迎えた教皇様の挨拶。「私たちの絆をさらに一層強めるためには、これから神学上の対話を続けるにつれて出てくるであろう様々な問題を解決するため、可能な限りの努力を傾けねばならないと考えています。」

● 6・29 聖ペトロ・聖パウロの祝日に当たり、聖ペトロ大聖堂でミサをあげられた。公の場でのミサは、4月の骨折事故以来初めてである。

● 7・5 メキシコ司教団を迎えて。「互いの一致を大切にしてください。そうすればペトロの後継者と共に全教会の希望と不安を共有することができましょう。」

● 7・13 一般謁見で、教会における女性の役割についてのカテケジスを続けられる。「信仰を伝え広め、社会を人間化するためには、女性の限らない寛大さと献身が必要でです。」

● 7・24 アンジェルス折りの後、ルワンダのため平和へのアピール。「ルワンダの悲劇は私たちの良心に対する緊急の訴え、連帯への呼びかけです。善意の人々による援助活動、私たちの愛と援助を待つ多くの兄弟姉妹たちの運命を聖マリアの御手に委ねます。」

教皇様は、20日の一般謁見の時にも同様のアピールを行われた。

● 7・31 夏の滞在地カステル・ガンドルフオにて、恒例のバッハの宗教音楽演奏会に出席された。「各国からの音楽家の皆さんによる演奏は、平和と一致を求める人類共通の願いをはっきりと証しています。」

## 教皇様のうごき

なぜ召し出しが  
へっているのか

(…) 歴史を振り返ってみれば、修道生活における熱意と活力の低下は、多くの場合、福音的貧しさが理解されず、実行もされなくなっていることと関連しています。がむしろ「所有」しようとする状態から離れ、私たちが救うため「貧しいもの」となられた」(IIコリント8・9参照)キリストにならうことによって、修道者は真の清貧生活を送るよう召されています。「貧しい人々に対して連帯性を示すために、自分たちの生活を反省するよう」(「贖い主の使命」60番)召されているのです。自己を自由に、全くキリストと教会のために捧げることによって、修道者は至福八端の精神こそが世の姿を変え、世を神に奉獻するための唯一の道である(教会憲章31番参照)と、声高く証言するのです。(…)

(米国司教団へ、九三・五・二八)

※ 編集部では皆様からのご意見、ご希望をお待ちしています。本紙をお知りになったきっかけ、記事のご感想なども、お聞かせください。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、護照等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費  
■一年予約九百円 送料七百円 ■千部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替  
神戸  
3-72393